

人類史は国家連合時代から世界一体化時代へ

武田邦太郎

最後に、石原先生が人類に送られた最大の贈り物として、人類史が近く世界の一体化、永久平和時代を迎えようとしているとする歴史観を指摘しておきたい。世界はいま各国の核兵器開発競争、地球環境の悪化、食糧・エネルギー問題の急迫等により、人類の運命がしかなる帰着を迎えようとしているかという歴史的課題に直面しているからである。

石原先生が『戦争史大観』の初めに、その歴史観の核心、或いは結論を次のように明示された。

「戦争の進化は人類一般文化の発達と歩調を一にす。即ち一般文化の進化を研究して戦争発達の状態を推断し得べきと共に、戦争進化の大勢を知る時は、人類文化発達の方向を判定するため有力なる根拠を得べし」

「戦争の絶滅は人類共通の理想なり。然れども道義的立場のみよりこれを実現するの至難なることは数千年歴史の証明するところなり。戦争術の徹底せる進歩は絶対平和を余儀なからしむるに最も有力なる原因となるべく、その時期はすでに切迫しつつあるを思わしむ。

また、『戦争史大観の説明』には、同じ歴史法則が次のように語られている。「戦争は人類文明の総合的運用である。戦争の進歩が人類文明の進歩と歩調を一にしているのは余りに自然である。武力の発達、すなわち戦争術の進歩が人類政治の統一を逐次拡大してきた。世界の完全なる統一、すなわち戦争の絶滅は戦争術がその窮極的発達に達した時に実現せらるるものと考えねばならぬ」

「人類歴史は政治的統一範囲を逐次拡大して来たのであるが、それは文明の進歩により、主権の所有する武力が完全にその威力を発揮し得る範囲をもって政治的統一限度とする。すなわち将来主権者の所有する武力が必要に際し、全世界倒るところにある反抗を迅速に潰滅し得るに到ったとき、世界は始めて統一するものと信ぜられる。

このような歴史観によって「最終戦争論」が生まれ、最終戦争に必勝を期す東亜連盟運動が展開し、前記「生涯の五期」の第五期に述べたとおり、最終戦争を回避しつつ世界の政治的統一、永久平和を実現すべきことを熱願されるに到った。「最終戦争論」の本質は戦争絶滅論、永久平和論であったのである。

このような戦争の進歩と併行して、政治史の大勢が明らかにされた。『最終戦争論』に載せられた「戦争進化景況一覧表」は、戦争の進化と政治史の大勢との関連を簡明に浮き彫りにしている。ルネッサンスの火器使用以後、近代国家の発展が始まり、フランス革命以後、第一次欧州大戦までが国家主義全盛時代、第一次世界大戦から現代に到る国家連合時代とされる。当時は核兵器が現れていなかったから、最終戦争によって、世界の政治的統一、永久平和の扉が開かれることになっている。

現代は疑いもなく国家連合時代であり、一国家が単独で存続することはできぬ。ほとんど唯一の超大国家ともいい得る米国でさえ、北米自由貿易協定（NAFTA）を形成し、アジア太平洋経済協力会議（APEC）に参加せずにしては存立し得ない。欧州連合（EU）がいまのところ国家連合形態の先頭に立っている形であり、中東を除けば、世界の殆どすべての地域が国家連合形態に前進しつつあるといい得よう。

東亜連盟運動は日本（朝鮮は高度の自治を獲得して民族軍隊をもつ）、満州国、中国を主体とし、(1) 政治の独立、(2) 経済の一体化、(3) 国防の共同の3原則による国家連合を目指した。第4に、汪兆銘氏が東亜連盟中国総会を開いたころ「思想の一元」、或いは「文化の溝通」が加えられたこともある。現在の国家連合では欧州連合を除き、ほとんど「経済の一体化」が圧倒的ウエイトをもっているが、「国防の共同」が武器によらず「戦争放棄」によって厳守され、完成される事を熱願せざるを得ない。なぜなら、人類が核兵器を持って以後、武力による各国の安全、世界の平和は期待できないからである。

それでは永久平和の実現する時期はいつか。『最終戦争論』では、第一次欧州大戦から50年内外で最終戦争の起こり得る時代に入り、以後約20年で「世界統一」とされていた。

第一次欧州大戦（1914～1918年）から50年内外といえ、ケネディの米国とフルシチョフのソ連がキューバ問題で核兵器をもって睨みあったのが1962年で、開戦になっていけば間違いなく最終戦争であった。第一次欧州大戦から約50年後である。

ただし、『最終戦争論』の年代計算は文明の進歩の加速とその重大関節を示すものであったから、精確な年数を問う事は適当でない。石原先生は永久平和の扉の開く年代を測るのに、戦争学による科学的推算とともに、仏教の予言を信解され、両者はほぼ一致するとされた。戦争学による科学的推算では、永久平和の到来が余りに早いことになるため、その年代計算までは発表を躊躇しておられたが、仏教の予言に対する信解を得られて始めて、『最終戦争論』における永久平和実現の年代計算を発表された。昭和14年3月のことである（『戦争史大観の由来記』参照）。

ともかく現代は永久平和の実現を眼前にした国家連合時代である。世界の現実をみる限り、永久平和の実現など夢のまた夢のように思われるが、もし各国の歩調が「戦争放棄」において一致すれば、戦争に使われている各国の国家予算、科学、技術、或いは各国国民の能力が経済成長、生活環境の改善、食糧・エネルギー問題等に集中され、戦争も貧困もなく、病気や自然災害からさえ解放された地球世界が人類の眼前に姿をあらわすのではあるまいか。仏教の予言によれば、この歴史的趨勢が決定的なる時期は今後約 20 年、2015～2020 年ころとされている。